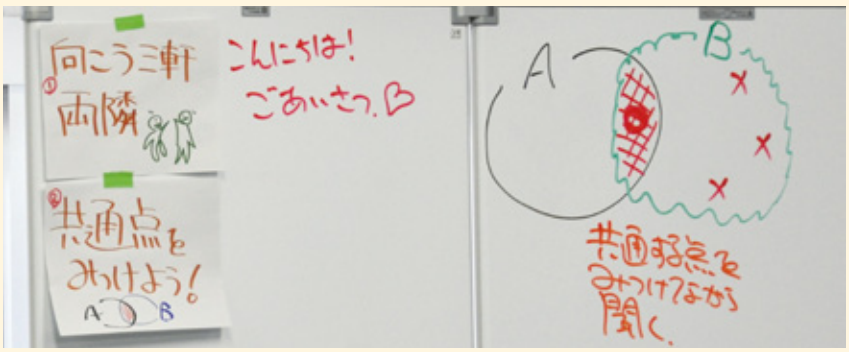
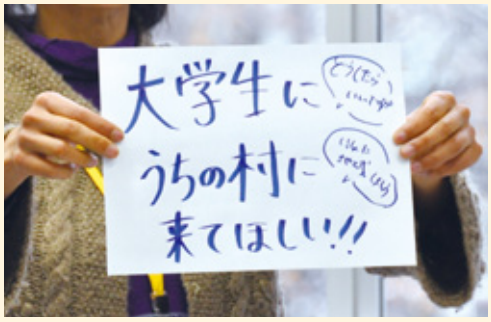
まちづくりワークショップって、どうやるの?

公開フォーラム講演記録集





富山大学地域連携推進機構
地域づくり・文化支援部門

まちづくりワークショップって、どうやるの?

公開フォーラム講演記録集

この講演記録集は、富山大学地域連携推進機構　地域づくり・文化支援部門の主催により、2016 年 12 月 10 日（土）に富山大学五福キャンパス（富山市）で開催された、「平成 28 年度富山大学地域連携推進機構地域づくり・文化支援部門特別公開フォーラム　まちづくりワークショップって、どうやるの？」におけるワークショップとディスカッションの内容をとりまとめたものです。

本フォーラムの開催および本報告書の作成にあたりましては、公益財団法人富山県ひとづくり財団からの支援をいただいております。この場を借りて篤く感謝申し上げます。

目 次

趣旨説明 …… 1

第１部　ワークショップ 「富山のこれからを話そう！」…… 3
　１．向こう三軒両隣であいさつ
　２．共通点を探す
　３．マッピング
　４．１人一言
　５．おにぎりの具
　６.「いいね」会議
　７．実現化

第２部　インタビュー 「豊かな話し合いを可能にするものとは」……27
　前向きになる状態をつくるには
　次に必要な新しい仕掛け
　熱量を上げる
　ワークショップの前段階
　ワークショップ（工房）とファクトリー（工場）の違い
　ワークショップのいろいろな手法
　ワークショップでの専門家の役割
　会場づくり
　参考文献

趣旨説明

富山大学人文学部（地域連携推進機構　地域づくり・文化支援部門兼任）

大西　宏治

こんにちは。ご紹介いただきました大西です。よろしくお願いします。簡単に今日の趣旨を説明させていただきたいと思います。趣旨と言ってもタイトルにある通り、「まちづくりワークショップって、どうやるの？」というのが一番大きな今回の集まりの狙いになります。皆さんもワークショップに関心があって、今までさまざまな形のワークショップを経験されたり、実践されてきた方もいらっしゃるかと思います。それぞれいろいろやり方があって、それなりの結果を出してきているでしょうけれども、実際にプロのファシリテーターに付いてワークショップを進行することはまだ体験したことがない方も多いのではないだろうかと思っています。

私自身、今日ファシリテーターをお願いしている青木さんのワークショップの指導を受けて非常に感銘を受けたことがあります。そして、まちづくりを考えるときに応用したり、実際にさまざまな人たちからの意見をうまく吸い上げて、それがうまく整理されていって、みんなでもっと前向きにまちづくりなり、いろいろなことを考えていけるようになると、何て素晴らしいことだろうと思ったことがあります。そういったことを皆さんと共有できる場になればいいなと思っています。

今日の大きなテーマは「まちづくり」なのですが、当初は富山市にお住まいの方がたくさん集まってくることを考えていました。しかし、広く富山県内や他県の方にもお集まりいただいているので、第１部の「富山のこれからを話そう」では、富山といっても富山市と限定せずに、富山県全体のこれからのことを皆さんで少し考えていきたいと思っています。

富山県はこれからどういう問題を抱えていくのかというと、これは全国どこでもそうですが、人口が減少していく、少子高齢社会になっていくことがあります。それから、富山県だけをとってみると、人口が薄く広くひろ

がってしまっている状況になっています。また、災害が少ないと思われていますが、思いの他、災害の危険性が高い場所でもあります。観光資源を考えたときも、季節限定性のあるものが多く、例えば冬季の観光をどうすればいいだろうとかいった問題がたくさんあります。北陸新幹線が通ってたくさんお客さんがやってくるけれども、皆さんを満足して帰せているのかというところも考えなければいけないことです。そのようにさまざまな問題がある。また、良いところもたくさんある。それらを合わせながら、富山の状況をより前向きに変えていくにはどうしたら良いか、皆さんで少し考えてみたいと思います。そして、青木さんの手をお借りしながら、皆さんからいろいろな意見を出していただいたり、それをまとめていけたらと思っています。

まず前半でワークショップを実践したみた後、後半ではワークショップの運営に関して、私と奥先生で、青木先生にワークショップに取り組んだいろいろな事柄についてインタビューしたり、皆さんからご質問をいただきながらワークショップの運営について青木先生を質問攻めにしていき、いろいろなものを吸収してみようと思っています。今日は４時半までになりますが、吸収できるものがたくさんあって有意義な時間を過ごせると思いますので、最後までよろしくお願いします（拍手）。

第１部　ワークショップ「富山のこれからを話そう！」

講　師：青木将幸さん（青木将幸ファシリテーター事務所代表）

東京農工大学農学部卒業、企画会社ワークショップ・ミューを経て 2003 年、青木将幸ファシリテーター事務所を設立。毎年 100 回ほどのペースで会議・ワークショップ・参加体験型研修の進行役をつとめる。2012 年に拠点を東京から淡路島に移し、国生み伝説のある島から日本中に出かける日々を送っている。

青木将幸さんのファシリテートにより、ワークショップを実践的に体験していきます。参加者は 30 名で、富山県内各地や県外からの参加者も含む多様な興味関心の方々が集まりました。主催側の教員も参加してみました。さあ、どんな風にワークショップが動き出していくのでしょうか。

（司会）　それでは第１部のワークショップに移ります。ここからの進行は青木将幸ファシリテーター事務所代表の青木将幸先生にお願いしたいと思います。それでは青木先生、よろしくお願いします（拍手）。

（青木）　青木将幸と申します。普段、会議やミーティング、ワークショップなどの進行役をする、ミーティングファシリテーターというお仕事をしています。いろいろな地域や団体にお邪魔して、いろいろな考え方をお持ちの方、バックグラウンドの方、小さい子供からおじいちゃん、おばあちゃんに至るまでさまざまな人が町に住んでいますので、皆さまの意見を聞きながら、これからの町をつくっていくような話し合いをお手伝いするような仕事です。

今日は、富山大学の特別フォーラムにお呼びいただいて、ここにいらっしゃる皆さんのいろいろな考え方や知見、これまでの経験などに教わりながら、一緒にまちづくりワークショップはどうやるのということを考えていければと思っています。

僕の仕事は、家族会議から国際会議までいろいろな規模の話し合いを進行することです。もちろん、まちづくりの話し合いを担当することもありますが、まちづくり以外の分野の仕事も結構多くあります。まちづくりの場合だと何が大事かなということを自分なりに考えて、僕の知っている限りのことをなるべく皆さんにお示しして、こんなやり方があります、こんなやり方を普段やっていますというのを見ていただきます。その中で何かしら活用いただけるものがありましたら、少しでもお持ち帰りいただければ大変うれしく思います。

今お二人からお話がありましたが、本当にいろいろなやり方があるのです。ワークショップのやり方は人それぞれだと思っています。ワークファシリテーター、進行する人の背景、個性、得意技とか全部違うので、一様に言えない感じがします。僕が最近付き合っているのは音楽系ファシリテーターです。ポストイットは使わず、音です。「富山といえば」というキーワードを出してきて、いきなり作曲です。「みんなで富山の歌をつくろう」と歌をつくって、まちづくりの未来を考えるというものです。あるいは、粘土をいきなり渡して、「これであなたの町をつくってください」と。そして、みんなと話しながら何が理想の町なのかということをやったりする人もいます。人によって全くやり方が違い、大変面白いです。僕は僕なりに今日は一生懸命やりますので、皆さんお楽しみいただいて、後半でご意見、ご感想をいただければと思っています。

途中で何か聞いてみたいこととか、ご提案とか、ご質問があったら途中でしていただいて全く構いません。今日は予定としては４時半が最後の終わりです。最後の１時間ぐらいは対談、ディスカッション、質疑応答をやって、前半の時間をワークショップ体験という形でお時間を頂戴しています。全体の構成でいくと、全体のテーマが「まちづくりワークショップって、どうやるの？」で、第１部がワークショップ体験で今の時間、富山のこれからを話そうというテーマで少しワークショップの体験をしていきます。第２部で大西先生や奥先生と豊かな話し合いを可能にするものは何だろうということを一緒に考えるというつくりになっています。

１．向こう三軒両隣であいさつ

（青木）　では、前半の体験に入ってもよろしいですか。早速行きましょう。この部屋を使って普段まちづくりのワークショップをするならこんなやり方をやっていますというのを皆さまにご体験いただいて、いろいろ感想などをいただければと思っています。

この中で、この会場の人の名前と顔を５人以上知っていますという方はいらっしゃいますか（会場数名挙手）。何人かいらっしゃいますが、大半の方は５

人も知らないという状況です。「初めまして」で会うシーンはまちづくりの場面でも結構多くあるのではないかと思っています。同じ町に住んでいても名前と顔が一致しない人も結構いたりします。その町で町の未来を考えようという話をしても知らない人が結構いると、人間は緊張したり、どういうふうに話そうかと気になったりすることもあろうかと思います。

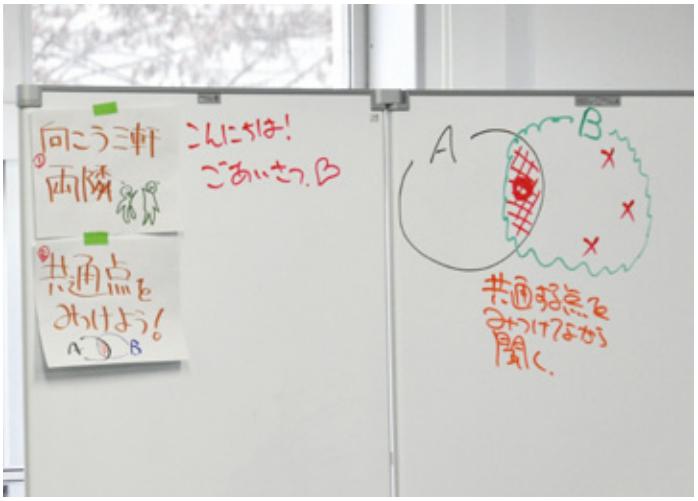
僕が最近よくやっているのが、まずはごあいさつです。昔の日本の言葉で言うと向こう三軒両隣。ご近所さんは、非常にお付き合いを大事にしていたわけです。こういったワークショップや研修会のシーンでたまたまお隣になった人、前後ろにいた人といろいろおしゃべりするような機会もあろうかと思いますので、まず向こう三軒両隣でごあいさつをしましょう。もし、差し支えなければ、周りを見渡してよく知っている人は知っているなという感じですけど、知らない人がいたら「初めまして、こんにちは、よろしくお願いします」とあいさつが大事ではないかと思っています。今から３分間、お時間を取ります。名刺などを持っている人はそれを使っていただいても構いません。なかったら口頭だけで全然構いません。立っていただいて、周りを見渡して「初めまして」という方がいたら、「初めまして、どこから来ましたか」「何々市です」「どこから来ました」と、ごあいさつタイムに行きましょう。用意、スタート。

＊＊＊　初対面の人を中心に近くにいる人、数人と挨拶を交わす　＊＊＊

（青木）　こんな感じでご近所さんと「こんにちは」の時間を持ったりします。「初めまして」の人たちが持っている緊張感がもちろんあります。当然だと思いますので、会議やワークショップの時間が２時間あるとしたら、冒頭何分かでもこういう時間を取るだけでも違います。「こんにちは」が言えたり「こんな人がいるのだな」「ヤギを飼っている人がいたよ」とか、いろいろと自分の心に残ったり、町なんかでは特に顔と顔が通じるだけでも気持ちの良い町になります。お互いのことを知る時間帯にしてもらえたらと思います。これが１つの例のご紹介です。誰にでもできます。向こう三軒両隣、ご近所の人とよかったら自己紹介をしてくださいとお願いする。これが１つ目のやり方でした。

ちなみに、僕は本を何冊か書いているのです。今日も少しだけ持ってきました。「初めまして」の人が持っている独特の緊張感のことを、僕らの分野の特別な用語でアイスと言います。これをほぐすようなゲームとか、自己紹介の工夫を「アイスブレイク」と呼んでいます。「初めまして」のときにやったら良いかなというゲームや自己紹介の工夫を 50 種類紹介したものが『アイスブレイク・ベスト 50』という本です。興味があれば後で立ち読みをして、気に入ったら本屋さんで買っていただけたらと思います。

向こう三軒両隣、こんにちはとごあいさつをするという手法でした。ご質問はありますか。



（参加者）　その絵（正面のボードに説明が貼られている）は何ですか。

（青木）　青木画伯の絵です（笑）。「こんにちは」しています。

これが１つ目の方法でした。皆さんのまちづくりのワークショップでこの手法を取り入れていただければ、ほんの３分から５分でお互いに知り合えたり、緊張度合いが違ったりします。みんなが口を開く、体を動かすというシーンがあると、人は緊張が少しほぐれます。行政がやるようなオフィシャルな会議だと、席がロの字にがちっと組まれて、人も立てないし、動けないし、身軽に「こんにちは」とか言えない感じで硬くしてしまうことがあります。そうするとほんとうに硬くなってしまいます。硬い状態ではあまり意見は出ないので、少しほぐしたり、軟らかくします。軟らかくし過ぎたなと思ったら締める。緩急が必要だと思いますけれど、大体初めの方は簡単にほぐし系のものを幾つか入れてから始めたりします。

ほかに何か聞いてみたいこととか、ご質問ありましたらどうぞ。よろしいですか。

２．共通点を探す

（青木）　２本目は、これは僕がやったのではありませんが、僕が被災地に行ってボランティアをしたとき、ボランティアセンターでボランティアの道具を借りたり、注意事項を聞いてからその地域に入るためのブースがあり、そこにいたおじさんがやってくれたものです。僕は結構印象に残っていて、これは偉大だと思ったのです。僕は１人で行って、その地域に入るのが全く初めてなので、誰も知り合いがいなくてドキドキして緊張するわけです。受付に行くとおじさんがいて、「お兄ちゃん、どこから来たの」「どこそこから来ました」「よく来てくれたね。ところでお兄ちゃん、何歳なんだ」と聞かれたのです。いきなり年から来たか、ボランティア登録だもんな、と思いながら、当時僕は 38 歳だったので

「38 歳です」と言ったら、そのおじさんは 60 歳後半から 70 歳ぐらいの人だと思うのですが、「奇遇だね。俺も昔、38 歳だった」と。そして、握手しました。「おじさん、38 歳のときに何をやっていたのですか」「まだ子供が小さくてあれこれ大変だったんだよ、おまえのところは？」「うちも 6 歳で」と話をして仲良くすることができました。これはすごいと思いました。僕は 38 歳、おじさんは 70 歳、一見共通項はないように見えますが、おじさんから見れば「俺も 38 歳だった」というのが共通項です。

まちづくりをやるときにいろいろな考え方の人がいます。頭が硬い人もいれば、非常に軟らかい人もいます。A さんには A さんなりの考えがあって、自分なりの経験や哲学、ものの捉え方があります。お隣に B さんがいたら、B さんに聞いたら B さんは B さんなりの考えがあって、意見があって、経験があって、哲学があって当然です。みんな、人間は同じではないです。同じ町に A さんと B さんが住んでいても違う意見をいうのは仕方がないというか、当然のことです。

では A さんと B さんはずっと分かり合えないかといったらそうでもなくて、A さんと B さんが共通できる点とか、一緒に「そうだね」と言えるゾーンがあります。人の話を聞くときやいろいろな人たちと接するときにこのゾーンを見つけながら人の話を聞けるか。A さんがもしこのゾーンを見つけようと思ったら、話は聞けるわけです。逆に人の話を聞くときに、B さんの話を聞いたら A さんと考えが違うので、「B さん、これは違う、あなたはこれが違いますね」と言って自分と考えが違う点に注目して聞こうとすると、だいぶ違ってくるでしょう。相手が何か言ったら「B さん、それは違います、B さん、それは間違っています」みたいな感じだと、僕と B さんはうまくいかない。だけど、そのボランティアセンターの受付のおじさんは「38 歳です」「奇遇だな、俺も昔、38 歳だった」と言うと、急にこのゾーンが明らかになって「そうか、このおじさんは俺と年が違うと思っていたけど、38 歳のころがあったんだ」ということで聞いてもらえます。これを 1 個でも見つけると、相手と話し合いがしやすくなります。

何かの話で、野球の話になり、「どこのチームが好きですか」「僕はジャイアンツとか大嫌いなんですよ」みたいな話になって「俺も嫌いだよ」「話が分かるな」という感じでいくかもしれません。仮に僕が嫌いなジャイアンツが好きな人が目の前にいて「こいつ、ジャイアンツが好きなんだ、あんな球団がよく好きだな」と、僕が仮に思ったとしても、野球が好きだという共通点があります。僕は阪神タイガース、この人はジャイアンツ。敵だと思いますが、野球ファンという意味では共通しているわけです。

私たちは相手の話を聞いたときに相手と私の共通する点を見つけながら聞く

ことを試したら、話し合いはスムーズになると思います。まちづくりのワークショップの冒頭にこういう準備体操みたいなことをすることがあります。大変恐縮ですが、周りを見渡して２人一組になっていただきます。「この人、大丈夫そうかな」という人と組んでいただきます。旧知の仲と組んでも別に問題はないですが、「初めまして」の人と組んだ方が練習としては面白いとは思います。先ほどのような自己紹介の続きをしてもらって、「何か共通する点はありますか」と話をしてみます。あるなと思って聞けば必ずあります。性別や年齢、眼鏡など、まず見た目で共通点が見つかってきます。その他、何が好きだとか、どういう考え方だとか、内側で共通点が見つかるかもしれません。ちょっとした話し合いの準備体操みたいな感じで、２人で話をしてみて共通する点を探そう、みたいなことをやっていくと面白いかと思います。そういうふうに少しほぐしながら本題に入っていきます。

　では、練習します。周りを見渡してこの人とだったら話せそうだなという人と２人一組です。余ったら３人でも構わないのですが、２人一組で組んでいただいて、自己紹介の続きをしながら、「共通することは何ですかね」という感じでどうぞ。

＊＊＊　近くの参加者どうしで共通点を探っていく　＊＊＊

（青木）　では、聞いていきます。共通する点はありましたか。

（参加者）　住む所は違うのですが、共通の知人がいることが分かりました。その知人のネタで盛り上がりました。

（青木）　知人のネタで、結構です。共通する点が見つかると基本的には盛り上がりやすいです。「あの人、知っているんだ」と、少し近づく感じです。相手と良い関係で話したかったら、特に初めましてのところは重なっていないので、どんな人がおるんやろ、知らんな、みたいな感じですけど、何とかさんと知り合いなんやと、こんな感じのこと分かるよなといった感じで距離が近くなります。この感じが共通点探しの１つの面白いところです。少し安心感が出るのです。その人のことを話していれば話も続くし、その人の考え方も分かるわけです。では、こちらの方々は何か共通点がありましたか。

（参加者）　循環農業です。

（青木）　循環農業ですか。

（参加者）　有機農業研究会を立ち上げていますので、彼も富山へ来て循環農業を始めていらっしゃるというので、もうぴったりです。

（青木）　ばしっと来ますね。

（参加者）　見た目は全然違うのですよ。

（青木）　見た目は全然違います（笑）。循環農業だと思ったら、ぎゅっとピンポイントで見つかります。地域の人でもいろいろな考えの方がいるけど、何か共通点を見つけてお話しすると、お話ししやすくなります。話のパイプができる感じです。その人とその話題であれば通じる感じがあるので、それを一つつくっておく。これが豊かにできてくるとまちづくりがしやすくなります。誰ともつながれないとまちづくりはできないのですが、何かしらの共通点でその人と話せるよ、みたいなことを見いだすきっかけをつくるお手伝いをする。これが２つ目です。

向こう三軒両隣、共通点を見つけよう、どちらも３～５分でできることなので何か皆さん、話し合いの冒頭にでも入れていただければと思います。

今日はこんな感じで幾つか僕が普段やっているワークショップの手法を皆さんに体験していただいて、だんだん話の本筋に一緒に入っていければと思っています。何かこの段階で聞いてみたいことはありませんか。よろしいですか。

３．マッピング

（青木）　３つ目です。これはポストイットの使い方です。皆さん、ポストイットは使ったことがありますか。いろいろな使い方があります。今日はこれを塔にして使おうと思います。こういう使い方もできると思います。目印です。ここにポストイットのタワーが建っています。まちづくりの話し合いの場合は、床を富山県なら富山県に見立てて、マッピングというやり方でまちづくりの話し合いをすることがあります。それを一緒に体験してもらいます。

やったことがある人もいるかもしれませんが、マッピングは床を使います。床のどこに立って良いかという目印が必要なので、床の真ん中に物を置いて

マークし、それを使って話し合いを始めたりすることがあります。ごくごく簡単な基礎的な使い方は東西南北です。例えば富山大学が中心にあるとします。この部屋を富山県に見立てて、「皆さん、今日はどちらからお越しですか」ということをやったりします。県単位でまちづくりの話し合いをすることはあまりないので、町内会であったり、コミュニティセンター、小学校など、皆さんが知っているようなものを目印にして、「皆さん、どの辺にお住まいですか」ということを話します。特に移住されてきた方や、土地勘がない人とか、誰がどこに住んでいるのかちょっと分からないなというとき、顔合わせをするときにまずこんな遊びをすることがあります。

皆さんにご協力いただきたいのですが、椅子を両脇に移動して、真ん中に広いスペースを作っていただいていいですか。

この椅子はすごいです。足の下に物が置けるレアな椅子です。富山大学は奮発しましたよ。これは相当なものです。

これが真ん中で、今、富山大学の五福キャンパス。何か福がありそうな名前ですね。何で五福と言うのですか。

（某教員）　それは知らないです。

（青木）　地理の先生でしょう（笑）。

ポストイットのここが五福キャンパスだとして、北、南、東、西で、「皆さん、どの辺から来ましたか」と。人によってだいぶ縮尺が違います。一応周りの人と確認をして、「氷見はもっと向こうだ」「私はこっち」などと言いながら、この部屋でうまく収まるような縮尺にしていただければと思います。事情があって私の住所は明かしたくないという方が、もしいたら。時々いるんです。スーパー売れっ子ヒーローみたいな、ファンが押し寄せる可能性があって、自分の住所を明かしたくないという人は「秘密です」と言って、真ん中にいていただいて結構です。もし、差し支えなければ「どこからおいでになりましたか」と聞いてマッピングしていきましょう。用意、スタート。

＊＊＊　指示に従って、参加者が移動する　＊＊＊

（青木）　何となく地理は分かりましたか。では、東側から聞いていきましょう。どちらですか。

（参加者Ａ）　魚津市です。

（参加者Ｂ）　魚津です。

（青木）　同じですね。

（参加者Ｃ）　上市町です。

（青木）　上市ということはお隣ですね。

（参加者Ｃ）　はい。

（青木）　どこまでが富山市ですか。

（参加者Ｄ）　東端です。

（青木）　地名的には。

（参加者Ｄ）　藤ノ木です。

（参加者Ｅ）　堀川です。

（参加者Ｆ）　私は総曲輪です。

（参加者Ｇ）　五福です。

（参加者Ｈ）　呉羽山を越えて中老田。

（青木）　後ろは。

（参加者Ｉ）　二口です。

（参加者Ｊ）　婦中町です。

（青木）　富山市内でもこういうふうにいろいろな地名があります。お隣はどうでしょう。

（参加者Ｋ）　射水市の小杉です。

（参加者Ｌ）　大島です。

（青木）　後ろは何ですか。

（参加者M）　高岡です。

（青木）　高岡は何人いますか。３人。
高岡のどの辺ですか。

（参加者Ｎ）　伏木です。

（青木）　伏木は海沿いですね。高岡のところに修正が入りました。
後ろは、黄色い帽子の方は氷見。氷見の人は？、３人。ありがとうございます。さらに向こうはどこですか。

（参加者Ｏ）　金沢。

（参加者Ｐ）　野々市。

（参加者Ｑ）　松任。

（青木）　遠くからありがとうございます（拍手）。
こんな感じで、どこから来た誰々ですみたいなことを自己紹介をしたり、あの人あの辺なんだ、後で氷見の話をしたかったら黄色い帽子の方に聞こうと。これが東西南北でやるマッピングです。
「初めまして」の場合はこうやって、例えばこれが同じ町内で交通安全のまちづくりの話だとすると、お母さんたちに集まってもらって、「子供たちが事故に遭いそうな所に立ってください」という感じでやると、お母さん目線でここは気を付けた方がいい、ここにカーブミラーを付けた方が良いということを話し合ったりします。地理的マッピングをすると、その町に何が必要なのかというようなことを一緒に話ができたりします。
これは東西南北でやるパターンですが、これはみんなの意見でもやるときもあります。何かについて、賛成の人はあっち、反対の意見はこっちという感じで立ち位置で分かれて自分の意見を表明してもらったりすることも可能です。例えば、いきなり TPP が賛成か、反対かというのも難しいと思いますので、聞

きやすいことで練習します。これは聞いたらまずいものもあります。みんなの政治的な志向が分かれて、あっちが〇〇党ねと分かったりすることがあるので、聞き方は微妙です。これはファシリテーターの責任です。

では次は、富山歴が「長い」か、「短い」かを横軸にします。こちら側を「短い」にしましょう。ほとんど富山歴がない人がここ。富山に引っ越してきて１カ月という人がいたり、１年の人がいたり、３年、５年いる人がいたり、生まれて６年住んでいますみたいな人はこの辺だったりします。何となく平均して 10 年、15 年、わしは 70 年ずっと富山市だ、みたいな、富山歴の長さでやると、いろいろ富山の歴史など、話が聞けます。

そして、縦軸は富山愛が強いかどうか。もう富山愛、ラブです、富山大好きです、みたいな、ものすごく強いと自覚がある人はホワイトボードの側です。まあまあ好きですくらいの人はここ。好き嫌いは別にないけど、まあ住んでいますという感じの人はここ。好き嫌いで言うと、実は正直言ってあまり好きではないかなという人は廊下側。富山は大嫌いだ、でも、努力しようと思っていると。富山が嫌いな人もいるのです。自分の町が本当に好きだったら子供たちは離れていかない。何か離れていく動機があるわけです。だから、好きか嫌いかというのは結構大事だと思うのです。富山愛がものすごく高いというのと、ちょっと嫌いかも、ということで縦軸です。

僕は富山が大好きになったので、ここに立つわけです。立ち位置で動いてみましょう。

＊＊＊　指示に従って、参加者が移動する　＊＊＊

（青木）　こういう感じのことをやってみて、富山愛が強い人が大半ですけど、そうでない人もいるというのをよく理解しておく必要があります。みんながみんな富山ラブなわけではないのです。もちろん、基本的には好きな人がこうやってまちづくりに関わってくださるのですが。

（廊下寄りに立った参加者）　本当に富山はどうにかした方が良いです。

（青木）　どうにかした方が良いという意味では、僕、これは分かるという人もいると思うのです。

（参加者）　僕も同じような感じです。

（青木）　どうにかした方が良いと思いますか。

聞いてもいいですか。微妙に一歩下がっていますね。

（参加者）　微妙だけど、ずっと住んでいます。

（青木）　微妙だけど、何かずっと住んでいますということですね。では次の方に聞いてみましょうか。

（参加者）　もうちょっと良くなるんじゃないかと思います。

（青木）　もうちょっと良くなるんじゃないか、愛情の裏返しみたいなものです。

（参加者）　雪がやはりちょっと、自分自身も運転が苦手なのでもうちょっと楽しめたら（笑）。

（青木）　人の話を聞いていると、だんだん富山愛が強い人たちの意見も聞いてみましょう。

（真ん中付近に立った参加者）　良いところで好きだけど、まだ伸びしろがあります。

（青木）　まだ伸びしろがある、最先端にはいない、富山愛はどんな感じですか。

（真ん中付近に立った参加者）　もちろん好きです。

（青木）　どういうところが良いですか。

（真ん中付近に立った参加者）　住みやすいです。楽ですし。

（青木）　楽です。

（真ん中付近に立った参加者）　日本全国が好きなのです。

（青木）　それではホワイトボードの近くにいらっしゃる、ごり強の人も聞きましょう。富山愛、むちゃ強いですね。

（ホワイトボード寄りに立った参加者）　ごり強ですか。

（青木）　（笑）僕はよそ者なので分からないのですが、食べ物が良いのと何が良いのですか。

（ホワイトボード寄りに立った参加者）　食べ物です。

（青木）　食べ物ですか。

（ホワイトボード寄りに立った参加者）　季節の。１年待ってもその食べ物は必ずあって、同じ味ではないのです。来年また食べられる味ではなくて、そこにいろいろ。俺は魚を扱っているから。

（青木）　寒ブリは毎年同じではないのですか。

（ホワイトボード寄りに立った参加）　去年は寒ブリ宣言は出ていないし、今年は寒ブリ宣言があったみたいな、自然の流れでどうにでも変わる。だから、自然を楽しみながら、雪も溶かすという富山愛。

（青木）　富山愛が雪を溶かすのだと（拍手）。だいぶ富山愛が強いです。

　このように、どの立ち位置の人からも一応聞いて、みんなの意見を聞いていくやり方です。これがマッピングという方法でした。

４．１人一言

（青木）　４つ目は、ちょっとお手数ですが、ポストイットを中心に円形にみんなの顔が見えるように立ってもらっていいですか。まちづくりのワークショップのときにお互いの顔を一同に見合うみたいな感じで一重の円を作っていただくことがあります。２列にならないで、みんなの顔が見えるように一言ずつお願いします。あまり長い自己紹介をするとワークショップの時間がなくなってしまうのですが、名前と顔ぐらいは分かった方がいいなということで、お名前と一言短く回します。はい、どうぞ。

＊＊＊　各自、一言ずつ自己紹介　＊＊＊

　こんなふうにして１人一言ぐるっと回すだけで全体の感じが分かったりします。まちづくりワークショップでは、「初めまして」になる会も結構多くあります。こうやって入りの部分、導入の部分をどうつくるのかが非常に重要になっ

てきます。

5．おにぎりの具

（青木）　さて、ここから先はグループに分かれて本論の話をしていこうということで、グループ分けのちょっとした工夫が必要です。いろいろなグループ分けの仕方があります。番号で分ける。あるいは興味のある人や、好きな人と組むというやり方も結構面白いです。

僕がもう１つやっているのは、偶然性に任せる方法です。むちゃくちゃになるグループの分け方が結構好きなのです。「おにぎりの具」というやり方です。ここにおにぎり職人が来ました。ものすごくおいしいおにぎりを握ってくれます。でも具は１つしか選べません。梅、サケ、おかかでもいいし、昆布でもいいです。この辺の独特なおにぎりの具はありますか。マニアックなものを選んでいただいてもその職人は握ります。メジャーな具でもいいし、マイナーな具でもいいです。私はこのおにぎりの具を食べたいのだというのを決めてもらいます。イメージしてください。このおにぎりはむちゃうまいと。おにぎりは１個だけです。

もし、それが心の中に浮かびましたら、私が「せーの」と言いますから、みんなで大きな声でそれを言います。すると、梅の人は梅チーム、サケはサケチーム、昆布は昆布チーム。時々本当にマイナーな具を言う人がいます。沖縄出身の人で前に聞いたのは油味噌です。本州の「何それ」みたいな人の中で、沖縄出身の人が「油味噌」と言って、誰にも分かってもらえなかった。でも、もう１人向こうの方で、さらにマニアックな、「最近コンビニで売り始めた何とかカルビ」と言い始めた。そういう人はおひとりさまグループです。誰とも組めなかったけれど、マニアック素材マイナーグループを組んで、おひとりさまの人たちが仲良くおしゃべりをし合うということができます。どんなにマニアックなことを言っていただいても、多分お話し相手がいるのではないかと思います。自分が本当に好きなおにぎりの具を大きな声でお話しいただければと思います。

いいですか。心の準備ができましたか。私が「せーの」と言ったらおにぎりの具を言って、あとは梅とか、サケとか呼び合っていただいてグループを結成します。グループがそろったら、あまり大きなグループだったら話ししづらいので僕が半分に割りますけど、基本的には同じグループの人と、この後富山の未来について一緒に話していきたいと思います。では、おにぎりの具を「せーの」で言いましょう。

（参加者一同）　＊＋～？＞＊＄＃！＜＆@～

（青木）　ほとんど聞こえないです。なので、探しあってグループつくりましょう。

＊＊＊　グループにわかれる　＊＊＊

6.「いいね」会議

（青木）　では、「富山のこれからを話そう」というのが今回のテーマなので、このグループでこの辺の話に入っていこうかと思います。くしくも運命的に同じ梅やらサケやら昆布やらで、お仲間になった皆さまとお話をすることになります。

富山のこれからのことを話そうというときに、僕が今日ご紹介したいやり方が「いいね」会議です。富山のこれからについて、富山ってもうちょっとこうだ

といいよね、みたいなことを誰かが言います。すると、基本的なお返事は「いいね」と言ってあげます。すごく変なことを言う人も中にはいます。その人が変なことを言ったとしても「いいね」と言ってあげます。

プラスアルファで「もし、そうやるならこうなるよね」と言って、また違う人が「違うね」「でも、富山はもうちょっとこうだといいよね」「いいね」と言います。誰かの発言に１回「いいね」と言ってみてください。そうすると話が結構膨らむのが分かります。次々お話ししやすくなります。

その逆をやると盛り下がります。誰かが何かを言ったら「それ、難しいんだよ」「それ、できない」「前にやったけど難しかった」と、完全に否定に入ると、どんどんみんなが意見を言えなくなります。

本当にいいかどうかは１回置いて、発言してくれたことに「いいね」くらいの気持ちでも結構です。もし、富山のこれからについて富山ってもうちょっと

こうなるといいんじゃないということを誰かが発案したら、取りあえずその発案を聞いたら一言「いいね」と言っていただいて、話題を膨らませていただけたらと思います。

話題は基本的には「富山のこれから」、富山市に住んでいる人もいれば、富山県の他の町にいる人もいると思いますので、広く富山を捉えていただいたら良いと思います。富山のこれからについてもっと〇〇だったらいいな、みたいなことを思い付く限りいろいろおしゃべりしていきたいと思っています。どんな角度からお話しいただいても結構です。少子高齢化のこともあれば、環境のこともあれば、お魚で寒ブリ宣言の話もあるかと思います。出てきた話題についていろいろお話をして「そうだね、いいね」みたいな話をお互いにしていきたいと思っています。

もし、グループの中で何かメモ紙みたいなものやマジックを使った方が話しやすいということであれば、ここの文具コーナーを自由に使ってください。何もなしで口頭でもいいのですが、何か残したかったらこういったものを使ってください。ポストイットなど、今度はまともな方法で使っていただくこともできます。道具は使っても使わなくてもいいので、これで少しずつ本題に入っていきたいと思います。富山のこれからについて話そう。「いいね」会議を試してください。とりあえず 10 分ちょっと、これで話します。用意、スタート。

＊＊＊　グループごとに富山の魅力やこれからについて話題を出し合う　＊＊＊

（青木）　一度こちらを見ていただいてもいいでしょうか。「いいね」会議というやり方で、誰かがしゃべると誰かが「いいね」と一言言うというだけのルールの話し合いの仕方です。いろいろな話し合いの仕方があります。町の課題は難しい場合が多いです。何か言ってもそれは難しいみたいな顔をしてやりがちなので、少し雰囲気を柔らかくするための魔法の一言みたいなものが効くときもあります。「いいね」会議。もし、良かったら皆さんのお仲間とも時々でいいので試しにやってみてください。少し話がしやすくなったとしたら、それだけで御の字です。

ここまで、向こう三軒両隣、共通点を見つけよう、マッピング、１人一言、おにぎりの具、「いいね」会議、６つ紹介しました。あと１つぐらい紹介して前半のワークショップ体験はおしまいです。何かここまでの段階で質問や聞いてみたいことはありますか。次、最後の１本に行っても大丈夫ですか。

（参加者）　今日みたいに関心のある人たちとか、初対面の人が多いと盛り上がるのですが、町内会みたいに意外と顔も知っているし、今更照れるみたいになりが

ちではないかなと思うようなところで使うとしたら、どういうやり方がいいですか。

（青木）　顔見知りであればあるほど、関係性が固定化してくるのです。この人が偉くて、この人が下でと、何となく見えてきているのです。ある程度それが固まってくると、発言も固まってきます。だから、僕らは組み合わせを変えます。おにぎりの具なんかでもそうですけれど、普段の町内会だと 20 人だと、20 人で話をしてしまうのですが、ちょっとばらした方が自由に意見を言えたりします。例えば、自治会長さんがちょっと怖そうな人で強い意見を言って「うちの町内会はこうだから」みたいな感じで言うと、「言えないな」となります。おにぎりの具でやって、怖い会長さんが昆布グループに入ったとすると、昆布グループはご愁傷さまです（笑）。会長の話を聞くしかないです。残りのグループは救われるわけです。会長がいないとなるとちょっと言える感じです。関係性を少しほぐした状態をどうつくるかがポイントです。それをおにぎりの具でやるのがいいのかどうか分かりませんが、何かしらのグループ分けとか、いつもと違うメンバーでとか、富山大学の学生さんが各グループに入ってという感じで、何か違う要素を少し入れると雰囲気が変わります。

僕たち会議のファシリテーターがいつも意識しているのは何か新しいもの、英語では something new です。かっこいいね。何か新しいことを入れるわけです。特にマンネリ化した状態だと、何か変えなければと少し変えるのです。同じいつもの会議室の会議テーブルだけど、今日は違う雰囲気でやりたいなと思ったら、会議テーブルに黄色い布をかけて、真ん中にお花を１本置くだけでもいいし、真ん中にお茶とお菓子を置くだけでもいいです。今日は何か違うねという感じで、みんなの気持ちが少し違うと、新しい意見や発想が出やすくなります。特に固定化したグループには何か新しいもの、新しい組み合わせを入れることを意識してやるようにしています。そういった意味では移住者の方とか、外から来た人が来ているとか、学生さんがいるというのは非常に有効な打ち手になります。大変だと思いますが、ぜひ頑張ってください。

こんな感じでご質問いただければお話しできます。他にありますか。

（参加者）　それに関連するのですけど、私は今、まちづくりの協議会を設立したばかりで、いろいろ課題があるのです。そこにこられる方よりも、もっと他の人にも意見を聞きたいということで、フリーに人選びをしてワークショップをしたいと思っています。そういうときに誰を選んだらいいか。課題と、選ぶテクニックがあれば教えてもらいたいです。

（青木）　会議の参加メンバーを選ぶということですか。

（参加者）　そういうことです。メンバー選びです。

（青木）　その地域にはどんな人が住んでいるのかなと、まずみんなでリストアップをします。子供からお年寄りまでというのは年齢的リストです。違う形として職業的リストがあります。農家さんがいて、漁業をしている人がいて、パン屋さんがいてというようなリストアップもあるかもしれません。もともと地元系の人と、嫁に来た感じの人と、最近引っ越してきたおニューな人など、経験年数のリストもあるかもしれません。もしくは何か障害を持っているお子さんの親とか、大変な思いをしていたり困りごとを持っていたり、まわりの配慮が必要な独居老人だとかいった特殊事情を持った人のリストもあります。こういった地域に住む人のリストをいくつか作って、まずみんなで眺めてみます。

普段の会議メンバーでそれを本当にカバーできているのかというのを比較して、特にこの意見が反映できていないなとか、特にここの人たちの声が聞けていないなというのを見かけたら、メンバーにそういった層の人から１人、２人来てもらえませんかと。たとえば、いつも農家さんばかりの話を聞いて漁業系の人の話を聞けてないのでよかったら来てもらえませんかという感じでお願いをします。こういうバランスを取ることが参加者選びに大事なことです。

（参加者）　ありがとうございます。

（青木）　他にありませんか。大丈夫ですか。

最後にもう１本体験して、後半の解説に入ろうと思います。

７．実現化

（青木）　では、前半の最後の体験をさせてもらいます。ラストです。ここまで何となく話をしやすい状況をつくってきて、では最後にやるのがどういうものなのかということです。いろいろなやり方が考えられます。今日ご紹介したいのは思い付き実現です。何をするかというと、今「いいね」会議でいろいろ出てきている「タネ」があると思うのです。そのタネのうち、これは実現化させたら面白いのではというものがありましたら、実際にどうやったらそれができるか、芽生えをうながすような感じでやります。

やり方は非常に簡単で、誰か思い付きを持った人がいたら、その人が思い付きのタネみたいなものをお題として出してみてください。例えばあるグループ

で話をしているときに、「富山はやっぱり山だ」という話で盛り上がっていました。「そうだ。富山愛。特に山への愛を高める仕掛けを考えませんか」と。これは思い付きです。では山系の企画をみんなと一緒に考えてみないかと、呼び掛けてもらいます。するとこの部屋の中で、「山への愛だったら私は面白いと思うのでやりたいかも」という人が集まってきます。

これについて一緒に考えませんかというテーマを、思い付く人が出してもらって、「興味のある人、集合」とすると、３人来るかもしれません、５人来るかもしれません、10 人来るかもしれません、１人しか来ないかもしれません。１人も来なかったら取り下げます。でも、１人でも来たら、「じゃあ、一緒に考えましょう」と言って、そこで思い付き実現化チームが結成されます。

今、例で１つ出しましたが、他には例えば、今日は大西先生と午前中に市内を回ったのですが、富山の観光資源は季節でものすごく変動します。ある季節には来るけど、この季節には来ない。だから、通年でお客を喜ばせるような富山らしい体験案を考える必要があると話しました。これを一緒に考えたい人は集まれという感じで、思い付きチームでまた集まります。

このように幾つか思い付きでグループを立ち上げて、実現化に向けた話をします。どうやったらできるかというのを一緒に考えるような感じです。少子高齢化。子づくり倍増計画を考えたい。これは思い付きです。どんなものでも構いません。この富山の町を良くするための皆さんの提案なり、こんなことを一緒に考えたいのだけれど一緒に考えてくれる人いるかな、という募集を今からしていただいて、その募集を見比べて、他の皆さんはどこか入りたいところに入るということです。

何人か、提案してくださる方をまず募集したいと思います。マジックはここ

にあるので、書いてもいいよという方は取りに来てください。ありがとうございます。

＊＊＊　思い付きの提案者がテーマを書いていく　＊＊＊

（青木）　では、いくつかテーマが上がってきています。まだ途中の人もいるので、テーマが書けたら、その書いていただいたテーマを持って、こちらのホワイトボードの前に一列に並んでもらいます。皆さま、よりどりみどりのテーマです。ここに一列に並んでいただいてテーマ発表をします。他の皆さまは一番興味のあるテーマのところに集合していただく形になります。

今５人です。もうあと何人か出てくる予定です。２個も書いた人もいます。すごいね。エネルギーがあります。まだ書いている人もいます。もうあと何人か出てくると思います。短い時間でテーマが出てきます。出てきたテーマの中で他の皆さまが好きなものを選んでいただきますので、一番自分が関わりたい、興味があるというものをチョイスしてください。あと２人ほど書いています。もしかしたら、人数によっては吸収合併があります。

では、発表します。結構多いですね。発表してもらいましょうか。さあ、どんなテーマが上がっているのか、テーマを見るだけでもすごく面白いです。一番左側の方から大きな声で読んでください。どうぞ。

（提案者Ａ）　「いいね」と思ったものを仕込みでまとめてもらう仕組みの構築（拍手）。

（青木）　２つ目。

（提案者Ｂ）　親子のアウトドアで非日常の食とロケーションにこだわったパーティーを開催したい（拍手）。

（青木）　面白い、富山のアウトドアで非日常のパーティー、はい、次どうぞ。

（提案者Ｃ）　冬に雷があります。太平洋側は夏場です。こちら側は冬に結構きつい。これは実は世界に何カ所かしかないので、そういう意味で特徴のあるところです。冬の雷。寒ブリも呼び込むので、そういうツアーを考えたらどうでしょうか（拍手）。

（青木）　冬の雷ツアー。はい、次どうぞ。

（提案者Ｄ）　富山県はお祭りが多いので、365 日毎日お祭り騒ぎしちゃえ（拍手）。

（青木）　毎日お祭りだ。

（提案者Ｅ）　閉鎖的コミュニティ循環。富山県自体が閉鎖的なので、それを生かして、富山県だけで循環する。

（青木）　閉鎖しちゃえ。はい、どうぞ。

（提案者Ｆ）　富山の１次産業稽古塾、１年いれば農林水産全て覚えられる（拍手）。

（青木）　富山１次産業稽古塾、１年いれば農業、林業、水産業を覚えられます。すごい。珍しい。

（提案者Ｇ）　地域で防災力アップをテーマに多様な人がつながる地域づくりを（拍手）。

（青木）　なるほど、防災はみんなが関わりますね。はい、次どうぞ。

（提案者Ｈ）　呉羽山縦断トレッキングコースの創出。縄文時代の北代の方から、ずっとファミリーパーク、ガラス工房辺りまでコースをいくつか作ります。旧８号線の上に橋をかけるのです。

（青木）　はい、結構です。はい、次どうぞ。

（提案者Ｉ）　伏木の港から外国に行きたいという提案です。

（青木）　船は秘密みたいです。

（提案者Ｉ）　せっかくパスポートを持っている人もいるので、伏木の港から海外へ行きたいと考えています（拍手）。

（青木）　すごい、壮大なプランです。

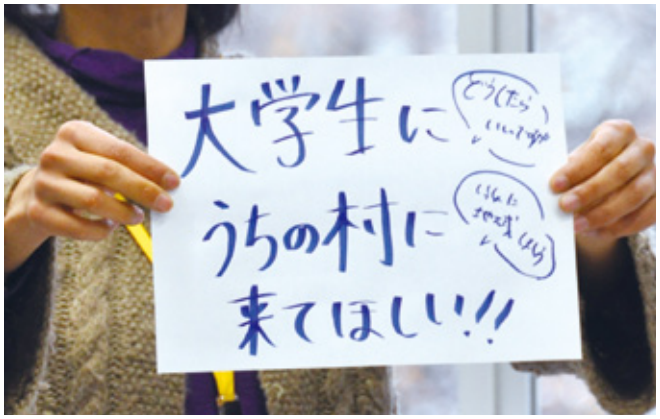
（提案者Ｊ）　私は海外のお客さまに、まちなかで遊んでいただくプランを考えたい

と思っています。実は今、海外の方対応の、まちなかのお店を楽しむためのガイドを富大の学生さんと一緒に話を進めているので、それをもう少し大人の方々に関わっていただけるようなものに仕上げていきたいと思っています（拍手）。

（提案者Ｋ）　地域の問題とか、もっとワークショップなどにいろいろな人が参加してもらえるような仕組みづくりや仕掛けなど、アイデアがあれば聞きたいと思います。一部の人だけで盛り上がっているので、もっとみんなの意見を。

（青木）　もっと多様な人に関わってもらう仕掛け。はい、結構です。

（提案者Ｌ）　大学生にうちの村に来てもらうにはどうしたらいいか、教えてください（拍手）。



（青木）　うちの村、いいですね。

というような案があがってきました。これらの中で、座っている皆さんはお好きなテーマに行きましょうみたいな感じで、提案者の前に立っていただきます。そして集まった人たちでチームを組む。何十分か話をして、それを実行するような形式です。何となくやり方は分かりますか。

前半のワークショップ体験の時間はここまでです。これで立ち上がって大体30分くらいです。30分でこんなことをやり取りしましたと、気が合ったのでこういうことでランチパーティーをやることにしました、というのがいくつか立ち上がってきて、それを実際にまちづくりの一つのプロジェクトとしてやろうという感じで進めます。

提案したテーマによっては誰も来ないかもしれません。来なかったらテーマの紙を戻して、自分の行きたいところに行きます。人数調整はいりますけれど、皆さんから出していただいた思い付きを実現化する会議の入りの部分でした。いったんここで休憩を挟みましょうか。

（主催者）　せっかくだから、提案の前に並ぶところまでやりませんか。もしかしたら、本当に動きができるかもしれないので。

（青木）　オーケー。じゃあ並ぶところまでやってみましょう。ほかの参加者の皆さ

んは提案者の前に並ぶところまで行きましょう。

＊＊＊　それぞれ自分が関心のあるテーマの提案者のところへ並ぶ　＊＊＊

（青木）　では、グループができている人を確認します。いいねと思った口コミの仕掛け、２人で。成立です。アウトドアファミリー、いない。では、テーマを下ろして好きなところへ行ってください。雷ツアー、365 日お祭り、２人、閉鎖的コミュニティ循環、３人。１次産業稽古塾、２人。防災力、３人。地域問題をいろいろな人に参加してもらう、３人。トレッキングコース、４人。結構人気があります。外国の方へ、２人。氷見の村、いますね。面白いからそのグループの人と近くに座って休憩しましょう。近くに座ってください。

＊＊＊　休憩中　＊＊＊

実際に、それぞれ集まったグループの中で、具体的な話し合いが盛り上がっていました。

第２部　インタビュー

「豊かな話し合いを可能にするものとは」

講　師：青木将幸さん
聞き手：大西宏治（富山大学人文学部准教授）
　　奥　敬一（富山大学芸術文化学部准教授）

（青木）　では、みんな戻っていますか。第１部のワークショップ体験、ありがとうございました。この後、第２部ということで「豊かな話し合いを可能にするものとは」というお題になっています。ここからは３人で何か話すというしつらえですが、皆さんからも何でもご質問やご意見を頂きながら夕方の４時半まで過ごしていきたいと思います。では、先生から。

前向きになる状態をつくるには

（奥）　第１部の方で非常にうまく場の関係をつくっていただいたというか、多分この辺に何か神髄、ヒントみたいなものがあったのかなと思いました。あるところまで持っていくと、特に何もしなくても今の休憩時間のあいだに勝手にいろいろと話が進むというのが、見ていてすごく面白かったです。

まず、そんな感想を持ちましたが、私自身もワークショップに参加させてもらって自分の中で感情がだんだん前向きというか、いろいろなものを出したいという感じになっていくというのが、自分自身でも分かってきました。ファシリテーターとして一番気を使われるというか、一番コントロールを考えているのが参加されている人のモチベーション、動機、前向きになっていく状態をいかに作り上げていくか、そのようなことが大事だということを、本番前に楽屋裏でお話ししました。その辺の持っていき方、そのあたりがたぶん今日の学びに表れていると思うのですが、その辺の構成のコツみたいなものを題材にしながらどういうふうに雰囲気を上げていくのか、どういうふうにすると、みんながしっかり上がっていくんだよというところを教えていただきたいと思います。

（青木）　構成はどこまで事前に考えていたのでしょう。「向こう三軒両隣」まで？。僕は進行表を作ったりするのですが、ほぼ進行表通りにはやらない人です。進行表通りにやると飽きてしまいますので、ノリです（笑）。

（奥）　そのノリの持ち上げ方、ノリでいかにそれぞれの人をうまく持ち上げていくかということが今日の構成に表れたのだと思うのですが。

（青木）　１本目のワークをしたときに参加者の皆さんがどういう動きをしているかという様子を見ます。今日の皆さんの軟らかさ、硬さ、お互いの知り合い度合い、積極性などをよく見るようにしています。参加者に無理をさせないことが非常に大事だと思っていて、参加者の皆さんにとってハードルが高過ぎるワークやアイスブレイクや作業はなるべく控えたいわけです。みんなが無理なく関われて、楽しめて、本題に向かえることができたらと思っています。

（奥）　今日で言うと、盛り上がったポイントは大体どのあたりですか。今日はこれくらいまで行けるかなと見えそうな感じのところ。それもやはり段階的ですか。

（青木）　１つ目のワークが「向こう三軒両隣」というのだったと思いますけど、これでみんな非常に動いている感じがしました。やりたくない人だったら動いていないです。自分の足でよく動いていらっしゃる方が多かったし、積極性のある方が非常に多いという集団です。みんな、必要な人に会っている感じがありました。

　でも、共通点を見つけようというのはやる予定ではなかったのです。ある参加者の顔を見ていたら入れたくなったのです。その方と 70 歳のガタイのいいおじさんがかぶったのかな（笑）。結構いい加減です。

（奥）　良い加減ですね（笑）。大西先生はどうですか。

（大西）　今日は自ら入っていろいろ体験させていただきました。よく知った人たちの中でワークショップを運営するのだけど、それでもやはり自分のことを少し話してもらって、知っている中でもお互いをもう１回確認するという作業が重要なのだと思いました。確認するということがアイスブレイクにつながることにもなるのかなと思いながら話を伺っていました。

　あとは、今日はいろいろな形で皆さんがお互いに知り合うようなスタイルを取っています。確かにこういう知り合い方、お互い分かる方法はいろいろある

のだなと。

あと、グルーピングはどんなワークショップでも苦しみます。おにぎりの具という偶然性は素晴らしいです。これはすごく感動しながら体験させていただきました。

（青木）　集団の状態や様子によって今やるべきことをやりたいというのが僕の普段のやり方です。別にお勧めはしません。

まちづくりのワークショップの流派は幾つかありますが、最もまともなやり方はちゃんとプログラミングをします。この手順でこうすると、普通は手順を決めるのですが、僕はかなり異端です。良い子はまねしないようにとテレビのテロップが入りますが、あれに近いと思います。この様式が本当に良いかどうかは分かりませんが、僕はこれに慣れてしまったので、これしかできません。

「次」のために必要な新しい仕掛け

（奥）　今日はこの中も割と初対面で、大抵はお互いに初めて出てくる話でした。そこからこれは面白い、いいねという格好で盛り上がってきました。これが多分２回目、３回目となっていき、少しお互いの話が分かってくると、逆に静かになっていったり、出てきづらくなったりする段階が来るのかなと思うのです。そういうところになってきたら、また新しい仕掛けをしていくのですか。

（青木）　そうです。何か新しいもの、something new だと思います。議論が分かったというときになったら、次に必要なのが実行だったり、実働だったり現場に行くだったりします。話し合いをして少し出てきたと思ったら、実行や実働の領域に入ると思うので、それをやることで状況が新しくなります。動きが新しくなります。それは手順として非常に素晴らしいと思います。

（奥）　今日は休憩時間にそれぞれのテーマでいろいろと話を進めていただいたところもあって、最後に大きな模造紙でアイデアを書き出しているところもありました。僕らもワークショップ運営というと、最後は模造紙に何かちゃんと形を作ってというところを目指してしまうのですが、あれはやはり最後にわれわれでこういう結論を出したという意味で大事なものですか。それとも、もうちょっと違うやり方で出す方が皆さんのまとまりがうまくいったりすることがあるのでしょうか。

（青木）　多くのワークショップは模造紙にまとめて発表させて終わりみたいな感じがありますけど、僕は実現化の方が面白いと思っています。幾つかあるタネのうち、どれかぽしゃっても別に構わないと思っています。グループ発表は、僕は基本的にあまりしない方です。発表が大事なのではなくて実行したいと思ったかどうかです。それを実現したいと思ったかどうかです。本当にしたいと思ったら、もう既に関係性をつくるきっかけはできているので、その人と連絡をしてやればいいだけなので、僕はワークショップで発表することにあまり意味はないと思っています。本当に面白い、動きたいと思うアイデアがあって、仲間とつながれたのであれば、誰に急かされなくても、締め切りを設けられなくても、ものは動き始めると思います。そこを信じています。というか、そこで上がってくるようなパワーがなければ、事は何も起こせないとも思っているのです。ワークショップの終わり方は放置みたいな感じです。あとはよろしく、みたいな感じで、「みんなやりたくなったらやってね。さようなら」と放置することも結構あります（笑）。

（大西）　なるほど、私も行政関係のワークショップに交じることがありますが、行政は最後どうしても言葉にしなければ、みたいなところがあって、そこを目標にしてしまうところがあります。何となく実現可能性というところよりも、形で終わってしまうと、むしろ計画だけできたのにその後はどうなったのか、忘れられてしまうものが多いという印象は確かにあります。

熱量を上げる

（青木）　われわれが扱っているのは熱です。熱を扱っているので、冷めた状態のきれいな陳列物を作っても動かない感じがします。ワークショップ中に見ているのは皆さんの熱です。熱がどういう状態にあるかです。

（大西）　今のお話はすごく面白い。要は、熱を管理してそれを観察することが目的ではなくて、その熱をどれだけ上げていけるか、着火点になるようなワークショップが重要なのですね。

（青木）　はい。

（大西）　行政のものではワークショップ自体が目的化しそうなところがあります。そうではなく、ワークショップをやったことで、次はどういうことを進められるのかというところまで踏み込めると良いということなのでしょうか。

（青木）　はい、そうだと思います。何のためにやっているのかです。これをやることで富山愛が高まって、人々のつながりが生まれて、何か一緒にやろうぜというお仲間が一人でも生まれてプロジェクトが動けば、僕としては十分やったかいがあります。

（大西）　やろうぜという熱が上がるでもいいし、実際にこれはやれると思う人が増えるでもいいです。これはやったこと自体に意味があるのではなく、やったことからその先が見えることに意味があるということですね。それはすごくよく分かりました。

（青木）　よくアンケートをとったり、成果発表をするようなこともあります。今日もアンケートを取っていると思いますが、大事なのはその瞬間のアンケートでは全くないと思います。ワークショップに満足しましたか、満足しませんでしたかというのは、９割の人が満足しても良いでしょう。でも、大事なのは後日なのです。後日、僕が半年後、１年後、ここに来たときに、「あれがきっかけで、あんなことができたのだよ」みたいなことを聞かされる方が確実なアンケートだと思っています。その瞬間では分からないと思っていて、できた関係性が巡り巡ってこんなことになりましたということにこそ価値があると思っています。瞬間、そのときの満足度より、後日何が生まれたかを聞けるとうれしいなぐらいで仕事をしています。

（奥）　ということですので、今日のワークショップがネタになって何か始まったら、もれなく富山大学地域連携推進機構にお知らせください（笑）。

（青木）　教えてください。

（奥）　よろしくお願いします。

それで、皆さんにも聞いてみたいのですが、今日は自分が思っていたよりも熱量が上がったなという感じのする人はどれくらいいますか。手を挙げてもらっていいですか。私はこんなに熱量が出るのだみたいな。自分自身です。普段から熱があるから、別に普通だという人もいるかもしれません（笑）。普段はそんなではないけど、熱量出たなと。

（青木）　常に 100℃で、今日は 80℃でしょう。

（奥）　どうですか、会場の中で熱量が普段よりも今日は上がったという人いますか。結構いますね。やはりこういうことですか。

（青木）　熱を扱う仕事だというのは明らかです。皆さんは１本１本エネルギー体というか、薪みたいなものです。燃やせば絶対燃える。一人一人、熱の元はみんな持っています。組み合わせと、空気が通る状態と、きっかけさえあればぐっと燃えていきます。だから、ワークショップのファシリテーターは多分薪を組む人であったり、途中で皆さんも火をくべていたら分かるけど、途中で薪を足さないといけないとか、詰め過ぎてしまって酸素が入らなくなってくすぶってしまうときもあるので、その辺のバランスを取るお仕事だと思います。

（奥）　今日はいくつかワークショップをやっている中でもいろいろな質問が出てきました。多分もっといろいろと聞きたい人もいると思うのです。フロアの方からももうちょっと聞きたいことがあれば、お伺いしたいと思います。

（質問者Ａ）　経済学部の学生です。ワークショップは僕は今回がほぼ初めてで新鮮な体験だったのですが、それを実際に僕がやれるか。例えば、僕はいきなり富山愛で、「山への愛について高める仕掛けを考えたいけど集まって」と言って、自己紹介を５分して、いきなり本題に入って話を始めるような感じなのです。本当に役職、学者、行政マンぽい考えなのですが、今回のようなワークショップを間に挟むことによって、出てくる意見の量は変わるものなのですか。例えばワークショップをしなくても、そういった山への愛を高める仕掛けについて

のアイデアは、ワークショップをしてもしなくても数は一緒なのか。その辺の実際の効果はどれくらい出るのかというのが気になっています。例えば熱量が上がって、たくさんしゃべりたくても良い意見が出るとは限らなかったりするわけです。その辺が気になって、実際はどうなのかと思います。

（青木）　やってみないと分からないです。やってみてくださいという感じです。このやり方をすることで、たき火に例えると、始めは細かい枝から火を付けて、だんだん太い柱みたいなものにも火を付けようという手順だと思います。だから、ハードルの低いものからだんだん上げていくわけです。趣旨だけ説明して、いきなり「本題へ行こうぜ」と言って火がつくときもあります。だったら、ワークショップは要らないのです。こういう細かなアイドリング運転、準備体操みたいなものは要らないわけです。優れた参加者であり、みんなが知見を持っていて、富山の山への愛を高めるためにアイデアを心の中で準備をしてきて（レディネス）、いろいろ知恵やアイデアを持った状態で良いメンバーで６人ぐらいそろえて部屋に入ってくれば、下手な準備運動は要らなくていきなりぼんと行けます。そのためには呼び掛けや参加者選びなど前段階は必要ですが、なくても同じくらいか、それ以上のパワーを出せる可能性は十分にあります。

（質問者Ａ）　むしろ参加者の事前準備量に合わせてワークショップの量を増やしたり、減らしたり。

（青木）　そのとおりです。事前によく乾いた薪であれば、すぐ火はつきます。でも、取りあえず山からがっさり持ってきた、湿った薪も乾いた薪も混ざっているという状態であれば、少し整えをした方が燃えやすくなります。それぐらいの差です。まちづくりのワークショップの場合はみんなが専門家でもないし、みんながモチベーションがあるわけでもないし、みんなが堂々と自分の意見を言えるような立派な人たちの集団でもないので、少しこういう手順を踏んでみんなが参加できる準備を整えてから本題に入った方がやりやすいかもしれません。

ワークショップの前段階

（質問者Ａ）　そういったワークショップをやるときに、僕みたいな若者とか、この会場にいらっしゃる皆さんは結構いろいろなものを吸収できるような器が大きいと思うのですが、役所とか政治家の人で上の年齢の人だったら考えが凝り固まっていて、ワークショップはやらずに「はよ、やれま」とか、そういうふうになるじゃないですか。そこを「ワークショップやりましょう」みたいな感じの

雰囲気に持っていくにはどうすればいいですか。多分ワークショップは１回やり始めたらすんなり、今日みたいに火がつくと思うのですけど、ワークショップをやる前段階としてどういうふうに持っていけばいいですか。

（青木）　一緒に考えましょう。良いものを見せるしかないです。言葉では分からないですから。物を見ないと分からないので、良いものを見せるというのが一つの仕事だと思います。

（質問者Ａ）　例えばここに政治家の人を連れてきて、窓越しに見てもらうなどしてからの方がいいと。

（青木）　そういうことです。窓越しではなく、すでに入ってきている人も何人かいますが、入ってこられる人は大丈夫です。地域の名士みたいな方にごあいさつにだけ来ていただくとか、終わりのあいさつにだけ来ていただくとか。議員さんや偉い人はみんな忙しいから、「ごあいさつだけお願いします」みたいな感じでも、何かいつもと違うなと感じていただければラッキーです。この熱量の終わりの会は見たことがないぞというのを見せてあげられれば、察しの良い方が多いので、これはこういうことに使えるのだなという理解が得られる可能性はあります。

（質問者Ａ）　分かりました。ありがとうございます。

（奥）　なかなか良いですね。議論自体を見てもらって、それでまた周りが盛り上がってくるということですね。他にどうですか。

（質問者Ｂ）　暇な議員が今日は２人来ているのですが（笑）、今、本も買わせていただいたので読んでこいという話だと思うのですが、今日参加させていただいた私以外の多くの方が、多分これからまちづくりを含めたワークショップをやってみたいという方もいらっしゃると思います。私も今日のものを持ち帰って実際にいろいろなカテゴリーの方を集めてワークショップをやっていこうという思いがあります。

　ある方がファシリテーター、ワークショップを進行される方の役割は究極いないことだという言い方をされる方がいます。聞き方が難しいのですが、ワークショップをしながらその場をコントロールしようとすることもあるのか。もしくはこういったものを仕掛けることでその場の熱量が高まることを自然に見守る形になるのか。そのあたりの感覚を、途中で自分自身がその議論に入るこ

ともあるのかどうかも含めて聞かせていただきたいと思います。

（青木）　自由で良いと思います。特にこれをしてはいけないという決まりが僕の中にはないので、いなくなることが良いことだというのは僕も賛成です。だから、たき火で言うところの僕がいろいろいじっている間はたき火としてはまだ成功していないわけです。良いたき火になってくると、下手にほとんど触らなくてよくなってきて、勝手にがんがん燃えていく感じです。時々くべるかもぐらいのことで、あとはゆっくり見てみんなで談笑する方が大事なので、一生懸命薪をいじってふうふうしないといけないのは前段階です。僕が頑張らなくてはいけないのは前半のちょっとしたところ。そして、だんだん自分がやるべきことは減ってくるわけです。放っておいても後半のあの辺の時間は、僕がやっていることはもう待っているだけです。みんなが動いているので、待っているだけでいいわけです。僕はトイレに行ったり、飯食いに行ったりすることもあります（笑）。それで回るというのは一番良い状態なわけです。いなくなれてもいいぐらいの状況をつくるというのはそのとおりだと思います。

そして、自分も気ままに何か意見を言いたかったら言っても良いです。でも、それと、自分が思っている方向に全体を引っ張っていくのは別の次元の話です。それを誘導と言います。僕が思っている方向に誘導するのは、職業倫理上はやらないように気を付けています。富山の町はコンパクトシティとか言っているけど、本当はもっとこうした方が良いと僕が思っていたとして、そっち側に持っていくのは僕の仕事ではないです。地域の皆さんがご議論して、こっちが良いと思った方向に行けばいいと思います。

（質問者Ｂ）　ありがとうございます。

（奥）　ほかはいかがですか。今の話で、どうしても伝統的慣習でワークショップをやってしまうと、グループを作ったら一人、司会を決めなければと思っていた人もたぶん多いだろうと思うのです。今の話で言うと、そういうところこそ自発的に動くのが望ましいということですか。

（青木）　要らないです。ファシリテーターとかは要らないです。

（奥）　要らないのですね。最初にちゃんとそれぞれが自立的に動くようにしてしまえば勝手に進んでしまうのですか。

（青木）　はい、大丈夫だと思います。

（奥）　それは司会の人を無理やり決めてしまうと、その人があたふたしたときに話が回らないということもあるのでしょうか。

（青木）　苦労するので。３～５人ぐらいで集まったとき、司会がいなくても回っていたと思います。みんなにその力が十分あります。ほとんどの場合があります。

（質問者Ｂ）　私はワークショップの定義が分かっていないのですが、人数に関して思っていらっしゃること、何人ぐらいでのスタートが良いのか、最大ワークショップでやるとしたらここまでだとか、それはやり方にもよるのかもしれませんが、人数に関して何か示唆があれば教えてほしいです。

（青木）　何人でもオーケーです。

（奥）　１人でも？

（青木）　１人でもできます。僕の知り合いでこういう人がいます。頭の中に登場人物が出せる人がいるのです。１人でワークショップをしています。完全にオタクです。例えば何か課題があるけど、この課題を解決するのにぼんと登場して、ソフトバンクの孫社長がもし、ここにいたら何と言うだろうか、もし、松下幸之助さんがいたらどう言うか、織田信長がいたら何と言うか、ナポレオンだったらどうするだろうみたいなことをやって、それらを議論させてにこにこしている人は脳内ワークショップができているわけです。だから、１人でもできるわけです。

（質問者Ｂ）　それもワークショップですか。

ワークショップ（工房）とファクトリー（工場）の違い

（青木）　僕の中では立派なワークショップです。

ワークショップの対抗概念、ワークショップは何の反対言葉ですか。僕が教わったワークショップの先生は、ワークショップの対抗概念、反対言葉は何ですかという質問をしたところ、ワークショップの対抗概念はファクトリーであると教えてくださいました。ファクトリーというのは「工場」です。もともとワークショップは「工房」という意味です。工房と工場で同じようなものに見えるのですが、何が違うのかということを解説してくれました。工場は同じよ

うなアウトプット、製品をきちんと大量に作るのが仕事です。いろいろなものが出てきたり、毎回おかしいものが出てくるのは、工場的にはアウトです。工房は毎回チャレンジをして、今までになかったものとか、新しいもの、どうやったらこれはもうちょっと良くなるかということを、手を動かして職人なり、研究者なりが生み出していくような形態です。イメージとしては工房、ワークショップの方が効率が悪いし、時間がかかるでしょうけれど、新しい知恵やアイデアが出る可能性があります。良いものができたら大量生産して、みんなに普及しましょうというのは工場的にやればいいのです。教育の仕方でも、まちづくりの仕方でもワークショップ的教育とファクトリー的教育は違うと思っています。両方とも必要です。ワークショップの定義を言うとそういうことかと思っています。特にこの閉塞した状況をどうやって打開するか、ブレイクスルーを考えたいときには比較的ワークショップ型のやり方でやった方が出てくる可能性はあると思います。それは脳内ワークショップでも良いわけです。

（質問者Ｂ）　ファシリテーター側が複数名ということも結構ありますか。

（青木）　あります、今日は僕１人でやりましたけど、仲間と２～３人でやることもよくあります。楽です。

（質問者Ｂ）　ありがとうございました。

（奥）　ちなみに最大何人までワークショップをされたことがありますか。

（青木）　僕は 300 人です。僕の仲間で、1000 人ぐらいでやっている人はよくいます。同じ部屋に入って音響的に声が伝わればというのが限界です。もっと腕の良い人は東京ドームとかでやるかもしれません。500 人ワークショップをやったのはわれわれの仲間です。大人数で対応できるやり方でやるのです。

（質問者Ｃ）　ファシリテーターが数名の場合はどんな役割分担やチームワークで進められるのですか。

（青木）　本当にケースバイケースです。今日だったら、東京から来た僕の仲間が後ろで見ています。今日は関わっていないですが、昨日だったら「ここからやって」と言って渡し、「ええっ」という感じで渡されるバトンリレーみたいな感じです。１人でやっていると見えないこととか、疲れてきたりしたとき、野球でいうとピッチャー交代みたいな感じです。でも、状況を見ているので試合の流

れは分かっています。いつでも交代できるようにしていると、交代した後、部屋をよく見て「今これが必要だな」と思って、また戻れるかもしれません。そういうピッチャー交代型でやる場合と、メーンとサブのような感じで２人で組んで、掛け合いで夫婦漫才みたいにしているときもあります。それは相手との関係性によります。面白いです。無限の可能性があります。

これは女性のファシリテーターの方に教わったことですが、「青木君はこういうふうにしていてやっていていいけど」、終わってから休憩時間に、「ここまでのワークで男性と女性のどっちが先に発言していたと思う」と聞かれました。「気が付いていませんでした」みたいな感じで「何割の確率で男性が発言するのを、女性が待つ格好になっていたので、休憩の後、切り替えてみようか」と言われました。「参りました」みたいな感じでした。自分と違う視点を持ったファシリテーターと組むのは大変勉強になります。

（奥）　会場から質問どうぞ。

（質問者Ｄ）　われわれは団塊のシニア世代なのでワークショップのことはあまり分からなくて、QC 活動をやってきました。今、教育界、若い人たちの、善悪も含めて、ワークショップはどのような位置になって、教育の中でどう生かされるようとしているのか。ワークショップについて、こういう機会をわれわれがいただけているのですが、どういうふうに日本や世界で広まっているのか。この後、若い人の声も聞きたいと意識して考えているのですが、ワークショップであれば来てくれるのですか。

（奥）　まず、大西先生からお答え願えますか。

（大西）　最後のワークショップをやると言って、ほいと来てくれるようなものかと言われると、ここに今、大学生があまりいないことを見ると分かると思います。ワークショップがあるから参加したいという感じにはなかなかならなくて、自分が参加したいと思うものかどうかというところ。まずはそこの部分から参加してもらいたいと説得していく必要があるのかなとは思います。

例えば、小学校から班単位での行動みたいなことはあって、少人数で何かの形で議論するということ自体は、日本は学校教育の中で長くずっとやってきたとは思うのです。それをうまく最終的に議論を活発化していったり、意見を自分から前のめりになって出していったりというところまで行くような活動に、なかなか小中高の教育ではなっていないのです。

大学でも例えば学生からいろいろ意見をもらいたいというときに、今日のよ

うにうまくはいかないけれども、ワークショップを試みたりはします。ですが、教員側の技量は当然ワークショップを運営することに慣れているわけではないので、なかなかうまくはいかないです。学生もワークショップという言葉は聞いたことがあるし、若干体験はしたこともあるかもしれないけど、身体感覚でそれがしっくり分かっているという感じにはならないのかなと思います。

今日は例えば経済学部の学生が、ワークショップは初めてだという話をしたでしょう。だから、こちら側はいろいろな機会を提供しているように思いながら、学生はそれはワークショップだと思っていなかったりということはあるのかと思います。

（質問者Ｄ）　昔、IT はほんの一部の人間だけやっていたのですが、今は IT と聞けばほとんどの人がやっていますね。

（青木）　みんながやっています。

（質問者Ｄ）　そこまで行けばいいのかなという気もするのです。そこら辺はある程度、若い方々、役所の方々ももっとやっていけば、住民とお役所とのいろいろなコミュニケーションに使えるのかなと思っていて、それで広まってほしいというのはあったのです。

（青木）　ありがとうございます。そのとおりだと思います。読み書きそろばんの次ぐらいに来るような基礎的な素養として、これくらいのことはどの市の職員も、議員さんも会社の経営者も学校教育関係者も、ある程度できているとなると、相当厚みがあっていいですね。

（大西）　最近は自治体の採用試験でもグループディスカッションをやっているところが結構増えてきているのですが、そういうところでこういうのが良いというお話をされたりすることはあまりないですか。

（青木）　先駆的な市の職員研修を手伝うことがあって、僕が前に住んでいた東京の三鷹市は係長以上になるときには必ず僕のファシリテーションのトレーニングを受けています。

（奥）　学校でされる場合はありますか。

（青木）　学校もあります。学校の教員トレーニングをお手伝いすることもあります。

文部科学省がアクティブラーニングという言い方をして、子供たちが能動的に、主体的に学べる場をもっと持ちましょうということを言って、号令がかかっても実際にやれる人は少ないので、そういったところのお手伝いにあがることはあります。

（奥）　青木さんは、ファシリテーター稼業は何年目ぐらいですか。

（青木）　14 年目です。

（奥）　結構お仲間がいらっしゃるとおっしゃっていましたが、その辺の人たちも大体似たようなキャリアの人が多いですか。

（青木）　2003 年が日本でファシリテーション元年と言われています。ちょうどそのころから普及し始めました。

（奥）　それは何かきっかけみたいなものがあったのですか。

（青木）　僕が事務所を立ち上げたことかな（笑）。それは冗談です。いくつか、日本語で読める日本人の書いたファシリテーションの本が出始めた、ファシリテーション協会という、みんながそういうことを学べて成長し合える場づくりが生まれた、それをプロットしてやれる人、やる人がにょきにょき出始めたという時期だと思います。

（奥）　そうすると、今ちょうど誕生期が過ぎて、わーっと開いていく段階ぐらいですか。

（青木）　そうです。まだまだ開いていく段階だと思います。どんどん無法地帯のようにして、いろいろなやり方が増えています。ファシリテーションの人たちは結構アナーキーな人が多いので、資格制度を嫌うのです。もっと自由にというのが好きなのです。中には資格制度をつくろうとする人がいますけど、国家資格にするとか言ったら、多くのファシリテーターは絶対反対します。だから、ぐしゃぐしゃです。

（奥）　ぐしゃぐしゃながらもこうやっていくつもやっている中で、着実に社会全体に広がっていきそうな手応えはありますか。

（青木）　やり手はすごく増えています。僕が事務所を立ち上げた当初から比べると100倍以上に増えていて、それを実行できる人、富山でもいらっしゃると思いますけど、各地で実践できる人の数はものすごく増えていますので、それは心強いです。

（奥）　例えば、そうやってファシリテーターを名乗らなくても、今日こうやって体験した人がそれぞれの方でやっていくという、そういうつながり方は十分できるわけですか。

（青木）　そうです。うちの地域の地元の自治会長でさえやっています。「じゃあ、三つのグループに分かれよう」と、従来型の会議ではやっていなかったのに、僕なんかのやり方をチラチラ横で見ながら、こうやったら盛り上がるなと、何となくコツをつかむ人はいるのです。名乗らないファシリテーターは非常に重要です。僕みたいに名乗っているファシリテーターはもちろん必要です。でもファシリテーターとは名乗らないけど、そういう動きができる人が日本の民主主義のベースをつくるはずです。非常に重要な存在になります。

（奥）　皆さんもぜひ名乗らないファシリテーター、今日でまずは第１段階卒業かなという感じですので、ぜひ皆さんも持って帰って使っていただきたいです。

ワークショップのいろいろな手法

（質問者Ｂ）　手法論についてでもいいですか。

（青木）　どうぞ。

（質問者Ｂ）　富山だと、ワールドカフェがやはり使いやすいのか、かなり多くなっています。ワールドカフェと言わなくても、形式としてワールドカフェを導入しているケースがかなり多いのです。私が最初にワールドカフェを富山で体験したのは2009年ごろです。手法で言うとこれからこういうのがはやるというと変ですが、これがこれからの日本には必要なワークショップだという手法論があれば、いくつか提示してもらえたらうれしいと思います。ちょっとワールドカフェ偏重が強いので。

（奥）　まずワールドカフェとワークショップはどういう関係かというところからお願いします。

（青木）　ワールドカフェというやり方はワークショップのいくつかある手法のうちの１つと捉えていいと思います。1000 人でも対応できると言われている大人数で、みんなが１つのテーマを深めるための方法です。基本は４人１組に分かれてあるテーマについて４人でお話をします。ずっと４人で話していると行き詰まってくるというか、アイデアが枯渇してくるので席替えみたいなことを行いながら、いろいろな人と交わるのですが、１つのテーマを深めるというのに適した手法です。

（質問者Ａ）　あー、やったことあります。

（青木）　ワークショップ参加、初めてじゃなかったんですね。

（質問者Ａ）　言われてみればあれだ。

（青木）　あれです。留守番と旅人などと言われて、みんなが大移動して、残っている人が模造紙を書いてというあれです。あれがワールドカフェです。何となく話し合った気にもなるし、盛り上がるのでいいのですが、収束が難しいです。

（質問者Ｂ）　他にどんな手法があるのかなと。本を読んでから聞けば良かったのですが。

（青木）　いや、いいです。そして、ワールドカフェの後に思い付き実現化会議をした方がいいのです。いろいろ話しました、分かりました、頭の中で何となくこういうことが大事だというのが分かりました。しかし、大事なのは実行です。ワールドカフェにもう１本スパイスを足すとすれば、それを実現化するきっかけをつくってあげることが大事です。私はこれをやりたいと思います。「一緒にやる人はいませんか、この指止まれ」と、思い付き実現化会議でやると、ワールドカフェでやったかいがあるわけです。話し合いはしたけれど、これは何につながるのかよく分からない場合は、「はあ」となってしまうのですが、１人でも同志が表れて「よし、一緒にやろうぜ」と言って盛り上がって実働が始まれば、ワールドカフェは非常に有効な手段になります。ワールドカフェの手法自体は非常に良いベースを持っています。それを使いこなせるファシリテーターは実はそんなにいないのです。手法的にやりやすいのでみんながやるのですが、お尻の部分を使いこなすのが次の課題だと思います。それができるようになったら非常に有効な方法なので、どんどんやったら良いと思います。

（奥）　はい、次の質問どうぞ。

（質問者Ｅ）　私も手法の話なのですが、ワークショップをやるときにパワーポイントを使うと、大体決まった構成でやることが多いのですが、今回はやりながらアレンジするのもあって、紙でやっているのもいいなと思ったのですが、紙でやることのこだわりとか、メリットはどういうふうにお考えですか。

（青木）　僕がパワーポイントを使えないだけです（笑）。というか、パワーポイントだと方向性が強過ぎるので、事前に準備したものを出すのは良いのですが、その場で生むのは難しいのです。打ち直して配置し直すというのは何か格好が悪いです。ワークショップのプランは進行を考えて手順を事前に準備するのはもちろん良いと思うのですが、お客さんによってちょっと変えたいというのが僕の持論です。

女の子とデートをするときに、初めにここで集合して、あそこに行って、あれを食べて、最後にあそこの丘から夕日を眺めたらロマンティックになれるかもというデートプランがあります。そのとき僕は下調べをして、あのランチがうまいとか、いろいろ勉強して彼女を誘うわけです。ところが、待ち合わせに行って、「今日さ、イタリアンのおいしいところを見つけたんだよ」「私、昨日、イタリアンを食べたから」と言われて、どうしようというときに「でも、おいしいから」と言って自分のプランに引き込もうとすると、彼女的には「何だこいつ、昨日イタリアン食べたって言ってるだろう」みたいな感じになります。対応できていないわけです。「何か５時ぐらいに夕日が見えるんだけど」「私、今日は夕日は見ないから」と言われたときに、「夕日が・・・」と、もし僕が夕日にこだわっていたらプランとしては遂行できるかもしれませんが、デートとしては終わっています。負けです。

スライドで進行を示してその手順にやろうとすることは、それに近いところがあります。それがもし、その場にふさわしくない場合に修正がきかないわけです。だから、僕は事前にプランをあまり決め過ぎないようにしています。考えはするし、思考の訓練として準備はするけれど、これは違うなと思ったときに変えられるようにしておくのは非常に大事だと思います。山登りと同じです。このルートで行けば何時間で頂上に行けると。しかし、そこが土砂崩れで崩れていたらどうするというのができないと、生ものを扱っている意味がないという感じがするので、なるべく手書きです。

（質問者Ｅ）　ありがとうございます。

（青木）　ありがとうございます。

（質問者Ｂ）　そういう道をつくっていないときに、そういう状態になったときに慌ててしまうと思うのです。そういうときにどうニュートラルになるというか、落ち着けるか。そのときに意識していることや、されていることとかありますか。

（青木）　諦めるということです（笑）。何時までに頂上に行かないといけないと思うからあせるのです。今日は頂上に行けないかもしれないと。一緒に山登りをしている人が足をくじいてしまったとか、何か機嫌が悪い、仲が悪くなってしまったとか、いろいろあって無理に引っ張って頂上へ行けるかもしれないけど、危ないなと思ったり、無理だというときには、頂上を諦めるというのは非常に大事なチョイスです。その代わり、足をくじいている仲間も一緒に山を楽しめる登り方、下り方ができると思うのです。僕はそちらに合わせたいという感じがあります。「山は楽しかったね。今日は頂上へ行けなかったけど、次は体調を万全に整えて行きたいな」という気持ちで帰ってほしいわけです。ファシリテーターに「やれ」と言われて、「書け」と言われて、「発表しろ」と言われてさせられたけど、「ああ、しんどかった」みたいなやつは、デートとしては失敗です。

（質問者Ｂ）　ありがとうございます。

（奥）　例えが分かりやすいですね（笑）。

（青木）　デートか山登りです。では、実際に僕がデートが上手かというと、それは別問題です。山登りをしたことがあるかというと、登ったこともないです。3000メートル級は行ったこともないです。要らない情報ですが（笑）。

（奥）　では、手が挙がったので、どうぞ。

（質問者Ｆ）　今まで先生はいろいろなワークショップをやってこられたと思うのですが、最低の体験談と最高の体験談を教えてください。

（青木）　最低の体験談は非常に良い教訓を残してくれています。自分の中に残っています。ある会社の 100 年ビジョンをつくるという大きな計画でした。先代の社長がつくった会社ですが、若社長が引き継いでいるのです。若社長が社員のみんなと一緒に 100 年計画をつくるのだと、ロングビジョンです。うちの会社は 100 年後どうなっていたいのかということをみんなで意見を出してすごく良いものをつくるわけです。社員の皆さんも「すごい、やっぱり若社長、私たちの

声を聞いてくださる」と言って、みんなが気持ちよく参加しました。一生懸命いろいろなことを調べてきて、こうしたい、ああしたいと。「そのために私はこれを頑張る」と言って、「オーケー、これで行こう」という感じで、僕は自分では良い仕事をしたと思っていたのです。しかし、若社長がおうちでご飯を食べていると、前の社長の、現会長のおやじさんが「ばかもの、会社の計画をつくるのに社員の意見を聞いて何とする」と怒られて全部おじゃんです。青木君の給料も支払われず「おまえは出て行け、そういうものはうちの会社には要らない」と言って、おやじさんの権限が再度復活して暗黒の時代に入るのです。

（質問者Ｆ）　ありそうですね。

（青木）　あるのです。それで、僕が至らなかったなと分かったのが、僕は社員の意見を聞いたけど、お父さんの意見を聞かなかったのです。その会社を裸一貫でつくってきて、今の規模まで一生懸命頑張って借金も何もしてつくってきた、そのお父さんの声を聞かずに、他の皆さまの声を聞いて計画をつくったのが、プロとして僕の一番駄目なところです。最も聞かなければいけない人の１人を置いて、代替わりだからいいだろうと、若社長からも言われたのでそう思いましたが、いやいや、違います、この会社を大きくしたのは誰のおかげだと思っているのだという気持ちになります。その気持ちが分からなかったのが、僕の一番大きな失敗です。

（奥）　良かった方は。

（青木）　人生、つらいことだらけです。何が良かったのでしょう。どれも良かったとは思いますけれど。会社を経営されているあるご夫婦が、仲が悪くなったのです。社員が 10 人ぐらいいる小さい会社で、社員の前で「あんたがいつもこうだから」とご夫婦で殴り合ったりしたのです。社員はめちゃめちゃやる気がない。奥さんの話を聞いていいのか、社長の話を聞いていいのか分からない、非常に良くない状況です。そのお二人の間に入って会議を進行させていただきました。家族会議でありながら会社の経営会議でもあるというダブルです。良かったのかな。

その奥さまが何かに怒っているわけです。旦那はそれが何に怒っているのか、よく分かっていないわけです。より怒るわけです。「おまえは何で分からないのか」と、そのときにご夫婦の間に入って「お邪魔いたします」と言って「奥さま、何にお怒りなのでしょうか」と聞くわけです。旦那は黙ってそこに座っていて、僕が聞くわけです。何年前のあれこれ、こういうときに旦那に指示され

た、こういう仕打ちが本当につらかったのだという話を聞くことができました。

「旦那さん、今の話を聞いていましたか。これで奥さまはお怒りなのですけれど」と。すると、そのことについて全く自覚がない旦那が初めて自覚をしました。「そんなことでうちのかみさんがこんなに苦しんでいたのか。それは悪かった」ということで、素直に謝ることができました。全くつゆ知らずというか、自分としては良かれと思ってやったことがこんなに妻を苦しめていたのだということを表明することができました。それについて１本わびを入れることができました。これは非常に重要なシーンなのです。

そして、「お二人は仲が悪い状態にはなりましたけれども、この後どうされたいのでしょうか」という話です。「少しでも良い状況をつくりたいと、もし双方がお思いであれば、この１カ月の間、あれとこれはやってみよう、あれとこれは気を付けようと、３つずつぐらい自分がやれることを出してみてください」ということで、旦那さんがやれること、奥さまがやれることを３つずつリストしてみました。「では、このリストで１カ月後どうなっているか。よろしくお願いします」と言って、また１カ月後にその夫婦に会いに行くということを２～３回やって、その会社もそのご夫婦も良くなりました。それが僕の最近の経験の中では良かった仕事だと思っています。まだ子供も小学校１～２年生で、子供にとっても社員にとっても不安な状況を、話し合いの間に立つことで何かしらお助けできた。これはまちづくりみたいな大きい話ではないですが、僕にとっては非常に重要なお仕事の１つだと思います。

（奥）　冒頭おっしゃっていた、「家族会議から国際会議まで」という看板に偽りなしという話ですね。

（青木）　そうです。

ワークショップでの専門家の役割

（奥）　失敗の方はまさに誰に議論してもらうか、そこの枠組みをどうつくるかという話でした。あとの事例は、お互いにきっちり問題を考えながら出してもらったという、そのような事例だったのかと思います。

時間も残り少なくなってきたのですが、専門家の立場から少し聞いてみたいことが１つあります。ワークショップの中で専門家の役割は何だろうと私もいつも自問自答しながら関わるのです。今日みたいに大きなテーマでみんなと一緒に「これがいいよね」という話し方はもちろんできるのですが、自分の専門はこれだというのがあったときに、それに関しては「いいね」とは言えないも

のがあるのです。

例えば漁協などの方で魚のことが詳しい人がいれば、こういう海をつくりたいというとき、「いや、そういう海では魚は住まない」と言いたいときが出てくることがあるかもしれないですよね。そういう立場の人はどういう関わり方をするのでしょうか。あるいは、そういうことはどんどん言ってしまっていいのでしょうか。

（青木）　言っていいのではないですか。専門家も好きに言ってください。大丈夫です。みんなも、それをむしろ聞きたい。みんなは知見がない中、ああしたらどうか、海はこうしたら良いのではないのと勝手に言っているだけなのです。専門家の方も１メンバーとして思う存分言っていただければ結構だと思います。ただ、自分の発言に重みがあるというのは理解しておく必要が当然あると思います。これを言ったら重みがあると思いつつ、「専門家としてこれだけは言わせてください」として言います。言った後に少し自分を引っ込める感じで、言ったことでみんながどう思うか、観察できるゆとりがあればいくら言ってもいいと思います。

北欧の方でやっている会議の仕方は、専門家を両サイドで用意します。例えば地元の人たちに原発の話し合いをします。原発がうちの地域に来たいという話だけどどう思うかということを話します。こちら側には原発は大丈夫ですよという専門家、こちら側には原発はマジでやばいですよという専門家を両方用意します。専門家同士が議論するのではなく、市民が議論します。「うちの町にそれはどうなの」という話をします。「専門家に聞いてみたいことがあれば、市民サイドからいろいろ質問リストを出してもいいですよ」と。すると、「原発は安全ですか」、「いざ事故が起きたときにどうやって避難したらいいですか」という質問リストを作ります。そして、原発安全ですという専門家はこう答え、原発は安全ではないという専門家はこう答え、考えるのは市民という感じのプロセスを経ます。片方の専門家の意見だけ聞いてしまうと、そうですか、安全ですかとなってしまいます。「安全です」と言う専門家と「いや、全然安全ではないですよ」みたいなことが両方聞けると、「ほら」という感じで、いろいろ議論がしやすくなります。専門家にもいろいろ知見や方向性があるので、これが良いという専門家と、それでは駄目だという専門家の両方を聞かせた方がワークショップとしては面白いです。

（奥）　なるほど、今の話はなかなか面白かったです。専門家として呼ばれると立場的につらいところが実は結構あったりします。そういうとき、最初に企画を立てられる立場の方も交えて、議論をより活発にするための専門家の使い方を考

えてもらうと、こちらも面白い関わり方ができると思います。

（青木）　それは良いですね。

（奥）　大西先生からもいかがですか。

会場づくり

（大西）　青木さんのワークショップを準備段階から一緒にさせてもらって、やはりプロだと思いました。結果的にみんなが会場でバラバラという状態になっていますが、スタートのときに皆さんが快適に座ってそこから快適にスタートできる場づくりにすごく気を使っていらっしゃいました。そこがワークショップなり会議をするときの、成功する最初のステップなのかなと思います。入ってきて、そこに不快さを感じる、何かここは居づらいなと思わせないような空間を最初に可能な限りつくる。それがまず重要なのかなと見ていました。順番ややり方はその場で柔軟に変えていくということでしたが、できる準備は可能な限り全てされるわけですね。そこのところがすごいと思っています。場づくりをするときに気を付けているところを少し教えていただければと思います。会場づくりです。

（青木）　今回だと、もともとご用意いただいていた正面は向こうでした。それでもいいかなと思って、僕も入りましたが、移動式のホワイトボードがあり、参加する人数が 25 人前後だということを聞き、向こう正面で扇形でつくってみると縦長な感じなのです。これはみんなが動いたり、グループを組んだりするには

横正面の方がいいだろうなと思い、正面のチェンジをしました。その次は可動性です。いろいろなグループをつくっては分かれて、名刺交換などもしやすい、この部屋で最大限できる方式を考えて、椅子や机の配置をしました。物が動くときには、コートや鞄などが身近にあると面倒くさいのでみんな動きたがらない。だから、なるべく後ろに置ける準備をしました。人と人が通り抜けられるような椅子と椅子のすき間を準備し、使っていい文具が目の前、前の方にそろっていて、それがみんなにも見える位置にするという準備をしました。会場によっては時計の位置を整えたり、お茶コーナーを整えたり、お掃除をしたり、ホワイトボードマーカーで書けるもの、書けないものを選別して、書けないものを捨てたりするわけです。

多分山登りをされる方も恐らくこのロープを使うか、使わないか、分からないけど、いざというときにロープを持っておいた方が良いなという感じで持っていきます。ロープを使わないで登山をしても問題ないのですが、いざというときに出せるロープがあるかどうか、ナイフを持っているかは非常に大事です。でも、持ち過ぎると邪魔になるわけです。必要最小限だけど、ある程度の状況に対応できるバックアップの準備をして、柔軟に事に当たるというのが、準備でしたいことの一つです。

だから、事務局の皆さまに大変ご迷惑をかけたり、そろえていただいたのに「青木先生、あれは結局使いませんでしたね」とよく言われます。「すみません、人の命を救うロープを今回も使いませんでした、でも、良い登山ができました、ありがとうございました」と言って備品だけが残るということもよくあります。でも、備えあれば憂いなしです。

（大西）　もう１つプロだと思うのは、その場の様子に合わせて柔軟にいろいろなものを出していく、自分が持っているアイテムが幾つもあった中で一番適切なものをチョイスしていくことができるということです。普通の人はそこまでの反射神経も経験もないわけです。これは経験をするから何をチョイスするかという思考が研ぎ澄まされていくのであって、それを学ぶということは体験からしかできないようなものでしょうか。

（青木）　はい、体験から学んでいただければと思います。100 回ぐらいやれば上手になります。

（大西）　いろいろなものに出ていって、回数をやっていくと、分かることが増えていくということですか。

（青木）　そのとおりだと思います。主婦の方が冷蔵庫を開けて、これだけしか材料がないならこれを作ろうと、ぱぱっと作ります。あれはやはり経験値だと思っています。本来だったらカレーにこれが必要なのにあれがないとか言って「カレーができない」と終わるのではなくて、ないならないなりにこれで作ってしまえというのはすごく大事なスキルだと思っています。いつも万全な状態ではないし、トラブルももちろん起きますけれど、それなりに食べられるものを作るのが主婦の力です。そういう料理人の腕から学ぶこと、山登りから学ぶこと、サッカー選手や野球選手から学ぶことがいっぱいあります。でも必要なのは自分の経験値です。だから、失敗してもいいです。それほど迷惑にもなりません。大丈夫です。どんどん失敗して、まずい料理も作りながら「これはお母さん、まずいよ」と言われながら「そう、ごめん、やっぱりこれは合わないんだね」と学習して、次の料理に入るということだと思います。

（大西）　やってみることが大切ということですね。

（奥）　そろそろ時間になりました。どうしても今日ここで聞いておかないと心残りで今晩寝られなくなるという人はいませんか。大丈夫ですか。

それでは、第２部の「豊かな話し合いを可能にするものとは」をこれで終わりたいと思います。講師として１日われわれの熱を上げていただいた青木先生に盛大な拍手をお願いします（拍手）。

閉会あいさつ

（司会）　ありがとうございました。それでは最後に富山大学地域連携推進機構、地域づくり・文化支援部門長の奥敬一より閉会のあいさつです。お願いします。

（奥）　もうあらためて言うこともありませんが、大事なのは実現化です。せっかく今日は実現化のタネのところまで体験しました。これはぜひ本当に何かしら形にしていただければ、本日主催したわれわれとしてはそれ以上にうれしいことはありません。これがネタになってこんな良い仕事ができたよ、こんな面白い話が進んだよということがあれば、ぜひお知らせください。そこからまたわれわれ大学の支援組織として協力できることも出てくると思います。そういった形でいろいろと富山県内の連携が進んでいけばいいと思います。

もう１つは今日の皆さんのファシリテーションの体験です。これは自分で試していただいて、失敗しながら少しずつ上手になっていただいて、いろいろな活発な議論を職場や地域でしていただければ、これも大変主催者側としてはう

れしいと思っています。本日は本当にどうもありがとうございました（拍手）。

（司会）　ありがとうございました。以上をもちまして、富山大学地域連携推進機構、地域づくり・文化支援部門、特別公開フォーラムを終了したいと思います。

参考文献

青木将幸『市民の会議術　ミーティング・ファシリテーション入門』ハンズオン埼玉出版部、2012 年

青木将幸『リラックスと集中を一瞬でつくる　アイスブレイク　ベスト 50』ほんの森出版、2013 年

青木将幸『マーキーのこんな会議を見た!!　～やってみよう、ファシリテーション～』東京ボランティア・市民活動センター、2016 年

まちづくりワークショップって、どうやるの？ 公開フォーラム講演記録集

2017 年 3 月 25 日発行

編集・発行 富山大学地域連携推進機構 地域づくり・文化支援部門
〒 933-8588 高岡市二上町 180　富山大学芸術文化学部総務課総務・研究協力チーム

印刷　株式会社 チューエツ
〒933-0874　富山県高岡市京田498

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。